

レコード調整省力化のための検討

2005.10.28

平成 17 年度第 1 回総合目録データベース実務研修 第 1 班

北海道大学 三瓶由紀子

長崎大学 平林 昇

大阪教育大学 藤原奏子

鳥取大学 宮崎知子

はじめに

データベースの品質は高めたいけれどレコード調整に時間をかけられない、というのが目録担当者の正直な気持ちである。

NACSIS-CAT が始まった当初、レコード調整は各参加館の善意に基づいて行われ、特にルールは決まっていなかった。1989 年のニュースレター no.19 にレコード調整において作成館が責任を持つ事が明示された。書誌画面に作成館 ID が表示されるのは 1992 年からであり、1994 年にはコーディングマニュアルに書誌修正指針が記載された。その後、目録システム利用図書館間でのレコード調整を効率的にするために電子メールの利用が始まり、書誌レコード修正や重複レコードの統合に伴う所蔵の付け替えなどをより早く連絡するために、修正報告はニュースレターへの掲載から、参加館ごとに郵送されるようになった。このように、書誌レコード数の増加にともない電子メールの活用など調整作業の効率化の方策がとられてきたが、現場の目録担当者の実感としてはまだまだレコード調整に時間がとられているという印象である。

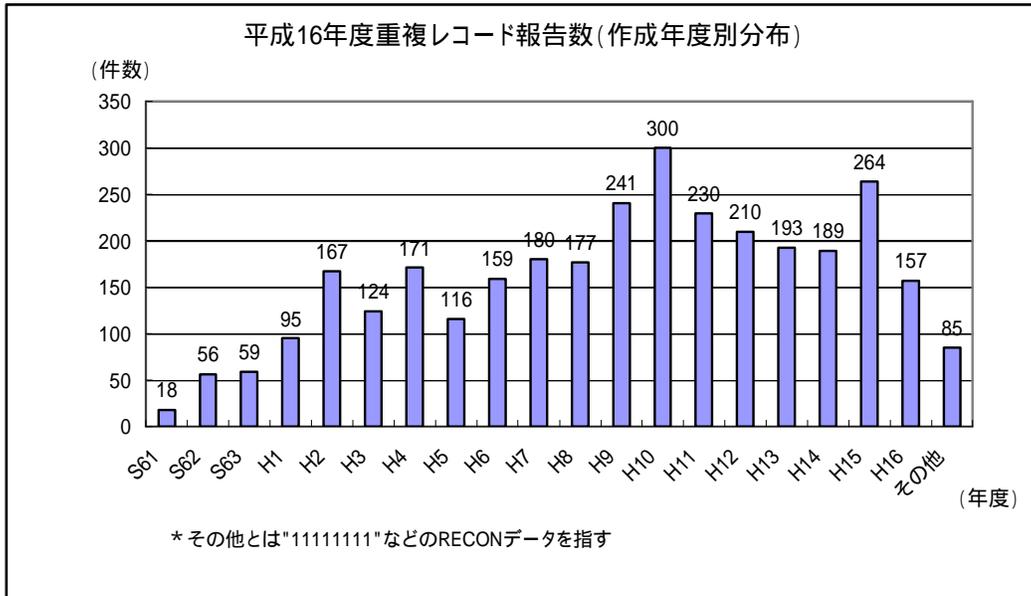
平成 17 年 10 月に出された書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト最終報告には NACSIS-CAT/ILL の共同構築・学術情報資源の共有という基本的な理念の衰退が疑われる現象が起きていること、それは総合目録の品質の劣化にも現れていることが述べられている。本レポートでは、この原因の 1 つとして考えられる、書誌作成館の責任の重さ、レコード調整手順の煩雑さに注目し、

- ・レコード調整数自体を減らすために、レコード登録時の点検作業を強化する方法について
- ・レコード利用時点で誤りを発見した際の、調整作業を省力化する方法について

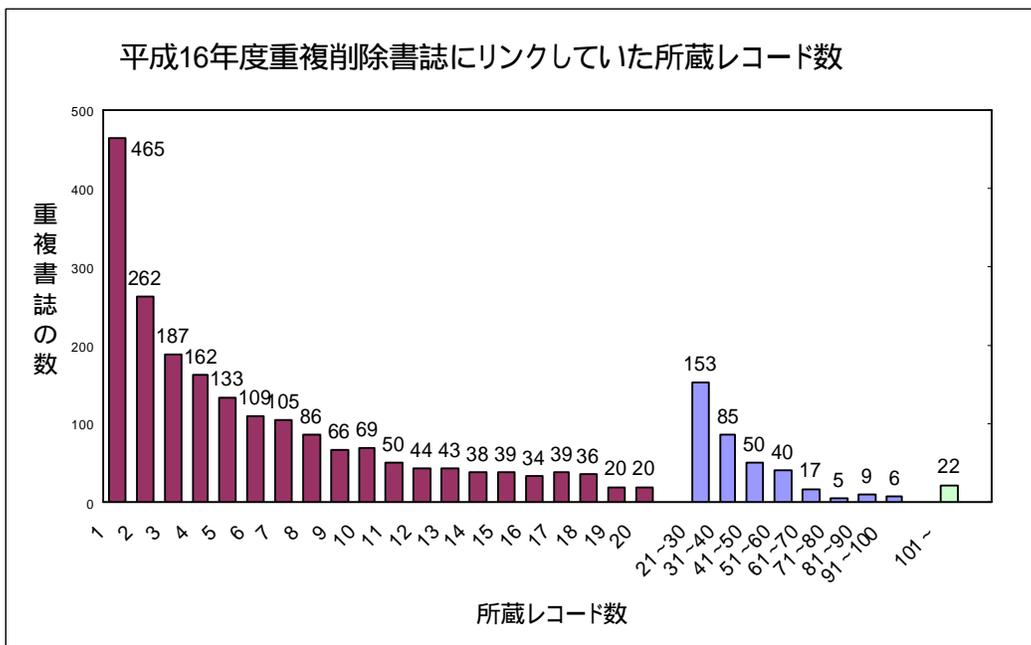
の上記 2 点を中心に検討する。

1. 現状と問題点

近年重複書誌レコードの多さによる NACSIS-CAT の質の低下が課題としてあげられている。平成 16 年度の書誌作成件数は 496,850 件、それに対して同年度に重複レコードとして処理されたレコードは 3,191 件、削除予定レコードとなったのは 12,250 件である。



分析：本来であれば作成されてすぐに重複と判明するのが望ましい。しかし実際には作成後何年も経ってから判明しているようである。平成16年度に報告された中では、平成10年度作成書誌が一番多いのはその現れであろう。全体としてみれば、年数の経過に伴い報告件数も減少しているが、CATの創成期に作成された書誌でもいまだに重複の報告がある。



分析：重複書誌については本来ならば早期での発見削除が基本である。しかし、表にあるとおり多数の所蔵館が付くまで放置された書誌も見られる。100件以上付いているのも珍しくない。

また、参加館の中には書誌の新規登録を行わない方針を取ったり、所蔵をつけるのを控える動きがみられる。この動きは共同所蔵目録としての NACSIS-CAT の根底に関わる事態であると考えられる。新規書誌の登録を見合わせる理由としては、人的資源の減少、職員のスキル不足等の理由が考えられているが、書誌作成後に発生するレコード調整を忌避するというのも理由の 1 つになっているのではないかと予想する。この状況を改善するためにも、レコード調整の省力化が必要であると考えられる。現状のレコード調整の方法では、真面目に調整作業をするほど作成館としては負担が増す。さらに書誌作成館は所蔵館への連絡等のレコード調整に多くの手間を割かなくてはならない。書誌を数多く作成する館では調整作業によって他の目録業務・所蔵登録、新規書誌作成が妨げられる可能性がある。

2 . レコード調整数自体を減らすための諸提案

レコード調整を減らすには、修正が必要な書誌を作らない事に限る。今の NACSIS-CAT では、書誌の作成に関し特にその資格要件を求めている。このため NII に参加の申請書を提出して ID を取得しさえすれば、若葉マークの初心者であろうと、その日からでも書誌を作成することが可能である。遡及入力などを外注化で行う場合、業者に依頼したりアルバイトを雇用したりして行うこととなるが、この場合も同様に作成者の力量に関係なく書誌作成が可能である。NACSIS-CAT の目録規則に熟知していないと思われるこれらの人が作成した書誌が、往々にして書誌調整の対象となっているのが現状である。

そこで考えられるのが、いわゆるライセンス付与制というものである。つまり新規書誌の作成が許されるライセンス（仮に A 級ライセンスとする）や、所蔵を付けることだけが許されるライセンス（同様に B 級ライセンス）などを研修の受講実績やその目録担当者の能力にあわせて発行し、書誌調整の対象となるような粗悪な目録を作らせないように目録作成に制限を与えようというものである。

しかしながらこの方法では、例えば小規模の大学で目録担当者が一人しかいない場合などに、その担当者が A 級ライセンスを取得するまで新規の書誌を作成することができないとなると、業務の停滞を招くといったことになりかねない。また一方で、すでにライセンスを取得した人の ID を流用して他の人が書誌を作成してしまう可能性をどう防ぐかなど、技術面での課題も多い。

NACSIS-CAT の参加館の目録作成者のレベルに大きな隔たりがあるのなら、いっそのこと共同分担入力方式を止めて、新刊の書誌については MARC を購入し、参加館は所蔵のみを付けるに留めることにしてはどうかといった極端な考え方も生まれてくる。この方法であれば、正確な目録しか作成されないのが品質が低下する恐れは無い。書誌調整が減れば、その分の人件費が浮き、MARC の購入費に充てることも十分可能であろう。

上記 2 点は NACSIS の共同分担入力方式といった観点にまで関わる重大な問題であるため、そのような考え方もあるといった提示にとどめ、以下ではより現実的な解決策について述べることにする。

2 . 1 書誌点検機能の強化

ここでは、現状の作成館責任制度ではあまりに作成館への負担が大きいため責任を分散し、作成館は書誌

を作成するがその後調整連絡が必要になったときには別の所蔵館が連絡を受け、書誌を修正、所蔵館への連絡を担当するという制度がとれないか、これにより点検機能を強化しレコード調整数を減らすことができるという可能性について検討する。

一つの方法として、現行制度とは逆に、書誌に対する責任を最新の所蔵館へ移していくという制度を考えてみた。これは所蔵登録時に疑義が生じた場合は直前の所蔵登録館と協議し、必要があれば書誌の修正・所蔵館への連絡作業を行うことができる制度である。この方法であれば所蔵登録をするとその書誌についての責任を負わなければならないので、書誌内容をより注意して確認するようになり、早い段階で間違いは正せるだろう。しかし書誌作成館の責任をあまりに軽くしすぎて粗悪な書誌が乱造されても困る。責任の所在が頻繁に変わり不明確になること、後々の所蔵館だけの協議で書誌が頻繁に修正されて最初の作成館の所蔵するものとはまったく違うものとなる可能性もあるなど問題点は多い。責任をもつのを嫌がって所蔵をつけなくなる館が続出することも考えられる。

つぎに、昨年度のDB研修レポート(*1)でも提案されていた、2番目の所蔵登録館に書誌の内容チェックを義務付ける監査館制度という方法について考えてみた。我々のグループでは、監査館制度について以下のように構想を試みた。2番目の所蔵登録館の監査終了後は監査館も書誌に対して作成館と同等の責任と権限を持ち、これ以降に所蔵登録を行おうとした館で書誌内容に疑義が生じた場合は、作成館・監査館のいずれと協議をしてもよいというルールとするものである。書誌の点検が厳重になるし、監査時点で書誌を修正しても2館間であるので、修正の影響が少ない。またレコード調整を受けた資料が研究室所蔵であった場合は現物確認に労力が大きく時間もかかるが、この制度であれば所蔵のLOCが図書館とわかる方を選んで協議することもできる。しかし、ILL等を配慮しLOCを図書館と研究室を使い分けて運用している館に対して負担がかかるのでは困る。また3番目以降に登録しようとする館が出てくるとも懸念されるだろう。作成館と監査館で役割分担が不明確であると混乱する場面も予想される。

このように現行作成館責任に代わる合理的な運用方法を見出すのは難しい。そもそも、NACSIS-CATにはさまざまな大学等の機関が参加しており、館によって所蔵資料に特徴がありそれぞれの得意分野がある。得意分野の資料はその館が書誌を作成している場合が多いだろう。それならばこれらの書誌に対する責任はやはり書誌作成館に担ってもらう方が全体として効率がよい。これが共同分担目録のよいところでもあろう。ただ、書誌の単純な作成ミスによる責任は当然その作成館が負うべきものであるが、出版事情等により書誌構造を変更せざるをえない場合などについても、最初の作成館に全責任を持たせざるを得ないものであろうか。一度作成した書誌に対しては、その後他館によって追加・修正された内容であったとしても問合せがきてしまうというのであれば避けたいものである。この辺りについては後ほど検討を加えることとしたい。

2.2 クライアントシステムによるチェック

2.2.1 書誌登録直前にデータベースを再度検索できるシステム

重複書誌作成の原因として、レコード作成中に他館がその図書についての書誌を登録してしまうことも

あるようである。クライアントシステムによっては、書誌作成中に登録画面と書誌検索画面を同時に開けないものがある。登録直前の検索が可能なクライアントシステムを選択することも必要である。

2.2.2 作成館との協議が必要な時に、書誌修正時にメッセージが出るシステム

NACSIS-CAT 上の書誌が自館資料の書誌と異なるときはコーディングマニュアル 21 章にある図書書誌修正指針に従うことになる。しかし修正に作成館との協議が必要な事項について、協議なしに修正してしまう事例もみられる。現行のシステムでは、一度修正した書誌レコードを元に戻す事ができず、修正作業にはいっそうの慎重さが求められる。コードの間違いや重複書誌についてのエラーメッセージを出すクライアントがある。同様に他館作成書誌を修正しアップロードする時に、クライアント側で「作成館との協議が必要な事項ではありませんか?」というようなメッセージが出るようにする、といった方法も考えられる。

3. レコード調整を行わねばならない状況での省力化

3.1 システム上の改良による省力化

3.1.1 修正履歴の記録

作られてから長い時間が経っている書誌は、作成館以外によって修正がなされることも多い。本来情報が充実することは望ましいことであるのだが、時として思わぬ結果を呼ぶこともある。作成館の知らない間に追加された情報によって、書誌が作成館の所蔵する現物と違ってきてしまうことである。あるいは原則としては作成館と発見館で調整が必要な修正を、調整せずに行ってしまう事もある。

この状況の改善策としては、修正情報の履歴を残しておくことが考えられる。現行のシステムで修正についてわかるのは、最後の修正日と修正館のみであって、修正の内容については一切わからない。修正されたかどうかはわかるのだが、どこを修正したかについては推測する手がかりが足りない。書誌に疑問があった時、修正された形跡があったなら、あらためて調整を行うことに二の足を踏むことにならないだろうか。また、VOL 積みめの書誌は作成館が所蔵していない巻号までが作成館の責任になってしまい、結果として作成館に大きな負担がかかってしまう。あるいは、VOL が追加された時に、作成館としては VOL を追加した参加館を知りたくなるのではないだろうか。

具体的な方法として、修正前のデータを残しておく事を考えたが、もう 1 つバックアップを持つに等しいデータベースの容量を必要とするため、現行のシステムではそこまでの余裕はないように思われる。そこで、最新の修正数件について修正館、修正日に加えて修正されたフィールド名がわかるようにすることを提案する。ある書誌のどの箇所がかつて問題になったかわかるので、調整の目安になりえる。理想としては、作成館との協議が必要な項目、所蔵館への連絡が必要な項目の修正がなされた時のみ履歴を記録する事ができればよい。しかし、なされた修正が重要なものか軽微なものかを機械的に判断するのは不可能である。また、記録を任意とするのは修正履歴保存の目的からいっても好ましくない。そこで修正・追加・削除が書誌の内容に重大な変化を及ぼさないと確定しているデータ要素については、あらかじめ履歴保存の対象外としておくことが望ましい。

(修正履歴イメージ)

< BAXXXXXXXXX >		
修正日	修正館	修正フィールド
20050831	FA0000000	TR
20050308	FA0110000	VOL
20041009	FA0000010	VOL
20040924	FA0001001	PHYS
20040903	FA0000111	AL

3.1.2 レコード調整専用フィールド新設の提案

レコード調整を依頼すべきかどうか迷った際に担当者が拠り所とし、まず確認するのがコーディングマニュアル2 1章とQ&ADBである。しかしながらQ&ADBの回答内容にはコレがあったり、原則どおりではないが所蔵館多数のため現状を維持する場合もあるというようなあいまいな回答もみられる。あいまいな部分はどうしても残ってしまうものであり、はっきりとすべてを決めてしまうことは不可能であるかもしれない。だが実際にそのような場面に遭遇すると、非常に混乱するのも事実である。少々疑問のある書誌であっても所蔵館多数であればそのまま見過ごしてしまった方がよいかもしれないという判断をすることにもつながる。調整による混乱の具体的な例として、所蔵館多数のため現状維持となった書誌に対して、事情を知らない他の参加機関が再度レコード調整を出してしまうようなこともある。([Q&ADB : A000809000](#) 回答 : 2005/08/03)

またNIIへ重複報告をしてから実際に処理が行われるまでには多少のタイムラグがあり、この間に所蔵をつけてしまうという例も、とくに新刊書などでおこっていると考えられ、さらにNII参加館双方のメンテナンスの手間が増加しているのではないかと考えられる。

このようなロスを回避するためにも、書誌作成館やレコード調整を行った担当者が、レコード調整のいきさつを記録したり、書誌作成時の経緯をメモしたりできる「レコード調整専用フィールド」の新設が望まれる。

ここで提案する「レコード調整専用フィールド」とは、業務用にはのみ表示し目録担当者の書誌同定判断の助けとなるようなフィールドであり、WebcatやWebcatPlusには表示しない。レコード調整の負担を減らし、目録業務を効率化するひとつの方法として有効であると考えられる。さらに、Q&ADBでとりあげられ書誌IDが記録されているものは、書誌詳細表示のこのフィールドからリンクを張り、クリックすることでQ&ADBの回答を確認することができるようになれば、より使い勝手がよくなる。

(レコード調整フィールドイメージ)

BOOK
<BN00580256> CRTDT:19870202 RNWDT:19960130 RNWFA:[FA001641](#)
GMD: SMD: YEAR:1980 CNTRY:ja TTLL:jpn TXTL:jpn ORGL:
ISSN: NBN:JP81000662 LCCN: NDLCN:
REPRO: GPON: OTHN:
VOL: ISBN: PRICE: 1900円 XISBN:
TR: 医療情報学 / 開原成允, 稲田紘著 || イリョウ ジョウホウガク
PUB: 東京 : 情報処理学会
PUB: 東京 : オーム社書店(発売), 1980.9
PHYS: 179p ; 21cm
NOTE: 各章末:参考文献
PTBL: 情報処理叢書 || ジョウホウ ショリ ソウショ <[BN00580289](#)> 4// a
AL: 稲田, 紘 || イナダ, ヒロシ <[DA00636107](#)>
AL: 開原, 成允(1937-) || カイハラ, シゲコト <[DA00631078](#)>
CLS: NDC8 : 498
SH: NDLSH : データ処理 -- 医療 || データショリ -- イリョウ // L

NOTICE:書誌<BAxxxxxxxxxxx>とは別書誌であることを調整済
NOTICE:Q&A:URL:http://.....
NOTICE:GA20:URL:http://.....

3.1.3 画像リンク

レコード調整専用フィールドでは、上記例のほかスキャナやデジタルカメラなどで取り込んだ情報源の画像をリンクさせることができれば、なお便利になるだろう。レコード調整では、問い合わせのあった資料が研究室にあった場合、教官と連絡をとり、研究室へ借りに行くこともまた負担になる。そのため個々の目録担当者レベルでは、書誌作成時に気にかかった資料の情報源のハードコピーをとり、手でファイリングしている場合も多い。紙にコピーして個人が保存する代わりに、電子的なコピーをとって、共有サーバに保存し、ほかのカタログも確認できる状態になるとよいのではなからうか。

すでに商用 DB 等では表紙の画像が表示されることが一般的になっている。図書流通センター作成の目録 TRCMARC では表紙画像データを作成しており、これと連携して流用させる可能性もあるかもしれない。しかし、書誌事項確認のためには表紙に加えて標題紙、奥付、背、表紙等の各情報源も確認できるようにする必要がある。もちろん著作権上の問題も考慮する必要もあるが、NACSIS-CAT 上での業務用のみの利

用であれば解決しやすいかもしれない。

情報源の画像データを共有する案については、平成 11 年度の DB 研修レポート(*2)でも提案されているが、当時に比べると技術は格段に進歩しており、低容量で高品質の画像を作成することも容易になっている。もちろんすべての書誌データに対して画像を持つ必要はないが、問い合わせの多い書誌や迷うような場合だけでも使うことができれば、書誌事項確認作業の軽減化が図れるはずである。

3.2. 修正連絡方法

3.2.1 NII からの調整連絡方法

所蔵館が 20 件以上ある書誌を修正した場合、所蔵館への連絡を NII に依頼する事ができる。NII に届いた修正報告は、年に何回か参加館に向けて発信され、それぞれ修正作業を行う。

この時、NII からの連絡は書面で各参加館に送られているのだが、これを web 上にも掲載することはできないだろうか。書面で届いた修正連絡には NC 書誌 ID と修正の内容が記載されているが、実際に修正を行う時には書誌 ID を 1 つ 1 つ手で入力しなければならない。web 上にデータがあれば、書誌 ID をコピーして張り付けるなど、書誌修正時の省力化が期待できるし、万が一書類を紛失することがあったとしても、内容の確認ができる。とはいえ、web 上にのみ掲載するのでは、参加館が実際に修正作業を行う意思が薄れるおそれがある。書面による連絡が届く事には、参加館に作業を行おう考えさせる効果がある。理想としては、現行の書面連絡と web 掲載を同時に行うことができればよいと考える。

3.2.2 レコード調整連絡用メールアドレス登録の義務付け

NII を介さずに参加館同士でレコード調整を行う場合、従来は FAX を使用していたが、平成 15 年度よりメールによるレコード調整連絡ツール(<http://mokuren.nii.ac.jp/recordctl/>)が利用できるようになった。これを使うとログインして書誌 ID を入力するだけで、書誌作成館と所蔵館のメールアドレスのリストを作成できる。特に書誌を修正して多数の所蔵館へ連絡する必要がある場合に非常に便利である。しかし所蔵館に 1 館でもメールアドレスが登録されていない所蔵館があった場合、メール用とは別に FAX 用の文面も作成して送信しなければならない。コピーを張り付けて少し手直しすればよいだけかもしれないが、このことに対してかなり負担を感じるのも事実である。

このツールが NACSIS-CAT/ILL ニュースレターで広報されたのは、平成 14 年度末である。以来 2 年半を経過したが、現在もまだ多くの参加機関でメールアドレスの登録は行われていない。

平成 17 年 10 月 24 日現在、全参加機関 1783 館中、参加組織情報にメールアドレスをまったく登録していない機関が 661 館 (37%) あり、登録していても、レコード調整連絡ツールの表示に使われる EMAIL:BOOK:の後ろにアドレスを登録していない機関が、321 館 (18%) にも上っている。これらを合わせると 55% になり、過半数の参加館に連絡ツールが使用できない計算になる。平成 16 年度グループ演習「重複書誌を減らすための諸提案」によると、平成 16 年 10 月 27 日現在、メールアドレスが登録されている参加館は 766 館 (43%)、登録されていても間違っていてメールが遅れない 318 館 (18%)、入力されていない 683 館 (39%) とある。したがって、昨年度の同時期からあまり前進がみられないことがわかる。

メールアドレスを持たない参加館は現在ではあり得ないのではないかとと思われるが、登録数が伸びないのはどういうわけだろうか。ひとつには、このツールの便利さがあまり認識されていないのではないかと考えられる。また、登録をしていなくとも自分からレコード調整を出さない限りは、困ることがない。個人のメールアドレスを登録するのが敬遠されているかもしれないが、その場合は業務用のアドレスを登録し転送の設定をすればよいだけである。

あるいは、登録の方法がわかりにくいということも考えられる。参加組織情報にスキーマバージョン 2 のフィールドを 1 つでも入力している場合は、クライアントシステムから参加組織ファイルを修正できないという問題もある。この場合は WEB-UIP:ISO:ILL プロトコル対応 ILL(JIS 版)から修正可能である。

- 1 . <http://webuip.nii.ac.jp/ill-iso/wu-login-jis-real.html> にアクセス
ユーザーID、パスワード、参加組織 ID を入力してログイン
- 2 . ユーティリティを選択 > 参加組織メンテナンスを選択 > 修正をクリック >
- 3 . EMAIL:BOOL:の後ろに、レコード調整用のメールアドレスを入力
- 4 . SAVE

この方法は NII の講習会に参加した者であれば知っているが、ニュースレターなどでは広報されておらず、目録担当者では知らない人が多いかもしれない。この件について NII からあらためて広報するか、登録していない機関に対してはメールまたは文書を送付して、登録を促してほしい。できることなら登録の義務付けが望ましい。

3 . 2 . 3 クライアント書誌画面から直接メールを送信できる機能

NACSIS-CAT ホームページにある「レコード調整連絡ツール」があり、所蔵館に対してメールによる一括連絡が行えるようになっている。しかし、実際にこの機能を使用するには、クライアントシステムとは別にブラウザを立ち上げて NACSIS-CAT のページにアクセスし、日常業務で使用している ID とは別の ID とパスワードを使いログインする必要がある。また NACSIS-CAT/ILL ニュースレター9号によると、このツールは所蔵が 50 件以下の書誌レコードへの使用が推奨されており、100 件以上の所蔵の場合は動作が不安定になる危険性がある。

メールアドレス記入が義務化され所蔵館へのメール連絡が容易になれば、現物を提示する必要のない連絡を全てメールで済ませることもできる。将来、メールでの連絡件数が増加して FAX での連絡件数を大きく上回るようになった時には、レコード調整連絡ツールのさらなる性能向上を求めたい。たとえば、所蔵件数の制限をなくすこと、業務画面に「修正」「登録」などのコマンドのように「連絡」コマンドを設け、クリックすることでオンラインによる書誌修正連絡ができるようすることなどである。

おわりに

レコード調整の省力化に最も効果があるのは調整の必要な書誌を減らすことであり、目録規則に則した書誌を作成することが一番の省力化になる。とはいえ、書誌の誤りや調整作業の必要なケースが発生するのは、避けられないことでもある。レコード調整作業において実際に書誌を修正すること自体にはそれほ

ど手間がかからない。むしろ確認すべき現物の検索、修正にあたっての作成館と発見館の協議、修正したことを所蔵館に連絡する作業が大きな時間を占めている。その部分を軽減することが、レコード調整の省力化への手段になると考えられる。

以上のようにレコード調整における省力化についての提案と検討をしてきた。現行のシステムでは実現が難しいものもあるが、それは NACSIS-CAT のあり方についてあらためて見直す時期が来たということではないだろうか。NACSIS-CAT の質の向上およびさらなる発展に向けて検討と改良を重ねることができればよいと思う。

謝辞

今回のレポート作成にあたって、国立情報学研究所企画調整課研修係のみなさま、ならびにコンテンツ課のみなさま、とくに目録情報系の浅野さんには多大なご支援・ご協力をいただき、誠にありがとうございました。

参考文献

*1 平成 16 年度総合目録データベース実務研修演習 3 レポート「重複書誌を減らすための諸提案」

*2 平成 11 年度総合目録データベース実務研修レポート「レコード調整周辺作業の軽減化」

書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト中間報告書

書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト最終報告